# 《太妹←曽》狂ったその先。

天狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
《太妹↑曽》狂ったその先。

【Ｎコード】
Ｎ０８９７Ｐ

【作者名】
天狼

【あらすじ】
またヤンデレです……
なんで私はヤンデレしか書けないんだろう（ー＿ー；）
見方によってはバットエンドです……（＿）

## 1　序章（前書き）

ヤンデレです。
とにかくヤンデレ。
妹子がかわいそう……。

# 1　序章

「妹子。おっはよ～！」

僕は気持ち良く眠っていたのに、その安眠を邪魔する不逞の輩がいた。僕のほっぺをむにむにいじってくる。うざい。

「んん～。なんですか、朝から五月蠅いよ……。」

すると彼は先程のモーニングコールからは想像も出来ないほどドスのきいた声で言った。

「誰に向かって口を利いているのかな？」

そして、僕を布団から蹴落とす。

「～～～ッ！」

彼は僕が痛みを堪えるのに必死になっている姿を見下ろし、笑っていた。

「うん、妹子は今日も可愛いなぁ。」

僕は痛みを訴える背中をさすりながら、上体を起こした。

「さて、妹子。私の事は覚えてる？」

「……？」

この人は……。

――この人、誰？
改めて考えると誰かわからない。でも、きっと、ずっと前から知っている……。そんな気がした。
ハァ。
彼がため息をついた。

「やっぱり、覚えてないんだね。まぁいいや。君の記憶が無いのは私のせいだし。」

記憶が無い……？そう言われると、そんな気がする。ここは何処？覚えてなくても、今居るここも、目の前に居るこの人も、どこか僕を安心させるものである事は解る。それ以上は、起きたばかりの微睡んでいる脳じゃ考えられない。
彼はそっと、壊れ物を扱うように、僕の髪を、ほっぺを撫でた。

「私の名前は、太子。君の主人だよ。ご主人様って呼んでね。」
「ごしゅ…じん……さま？」
「そう。そして、君は私の…私だけのペット。」
「ペット……？」
「君の名前は妹子。」

僕の名前…。ご主人様がつけてくれたのかな…？

「さぁ、これからは、ずっと二人だけで生きていこうね。」

彼は…ご主人様は綺麗な笑顔を浮かべていた。あまりに綺麗な笑顔だったからボーっと見とれいるとご主人様は、僕にそっと触れるだけのちゅーをした。このちゅー……覚えてる。懐かしい……。
しばらくすると、ご主人様は僕の唇から自分の唇をはなした。もっとしててほしかったのに。そう思い、ご主人様の顔を見た。すると

ご主人は僕にぎゅっと抱きついてきた。そして僕の耳元で、囁いた。

「記憶全部消してごめんね。でも、何も心配は要らない。君は私さえいれば、他の物なんて何も要らないんだから。それに、記憶だって、例えば……。」

ご主人様は僕の耳をペロリと舐めた。

「んん！！ご主人様……耳はだめ……。」

「こうやって体が覚えてるからね。」

ご主人様はクスクス笑った。そしてこう言った。

「妹子は私だけの物だ。他の誰にも渡さない。」

# 1　序章（後書き）

妹子のキャラ崩壊にも意味があるので見捨てないでください！↑

## 2　日常（前書き）

また性懲りもなくヤンデレです（＿＿；）
ごめんなさい！
見捨てないでくださいｍ（＿＿）ｍ↑

## 2　日常

ご主人様は僕が家からでるのを絶対に許してくれない。でも僕は日々、自分の居場所がどんなところか、窓の外を見て把握しようとしていた。周りには、木ばかりで人が住んでいる気配はない。ここは、僕とご主人様だけの世界。食べ物も、ご主人様が遠い所まで買いに行っているみたいだ。
今、ご主人様はまさにその買い物に出ている。

いつものように、窓の外を見ていると、庭に犬が現れた。泥塗れの汚い野犬だったが、まだまだ子犬である。

「わー！！可愛い！！」

久しぶりに見るご主人様以外の動物にテンションがあがる。僕は動物が好きなようだ。今すぐ撫でたいという衝動に駆られた。
でも、庭とはいえ外は外。ご主人様に見つかったら、怒られるかもしれない。
……でも、ちょっとぐらいなら、ばれないし、怒らないよね……？
そう思い、庭に駆け出した。

「おいで。」

そう手をさしのべると、その子犬は素直に近づいてきた。可愛い！
そっと撫でてやると、すり寄ってくる。なんて可愛いんだろう！
それから、その子犬を洗ってやり、一緒に遊んだ。

――周りも見ずに。

「妹子。」

背後から突然名をよばれた。

「っ！……ご主人様…。」

「何やってるの？」

ご主人様は冷たい目で僕を見ていた。怖い。怒られる。この感覚、覚えてる。前にもきっとこんな事があった。

「い……犬が。」

「へぇ、可愛い犬だね。」

ご主人様は笑った。なんだ、ご主人様、怒ってないじゃないか。怖がる必要なんて無いはず。そのはずなのに、なぜだろう。ご主人様が怖い。

「ですよね！」

わざと明るい声を出してみた。

「それ、私にも抱っこさせて。」

僕はその犬をご主人様に渡した。

「さぁ、妹子。家に入るんだ。君は金輪際、私の許可なしに、例え庭だろうと家から出てはいけないよ。」

ご主人様の有無を言わさぬ物言いは僕から逆らう気力を奪う。

「はい。ご主人様。」

僕は立ち上がり、家に向かって歩き出す。数歩進むと、体から力が抜けていった。

「……はれ？」

体……熱い。

クスクスクス。

背後でご主人様が笑っているのがわかった。

「ご…ごしゅ……じんさ…ま？」

「妹子は悪い子だから、ちょっとお仕置きしないと、と思ったんだけど。君はまだ本調子じゃないから、長く家の外に居るだけでお熱が出ちゃうんだね。可哀想に。」

僕は……調子が悪かったのか。知らなかった。

「アレはちょっと強いから君が生きてたことが奇跡なんだよ。」

――アレって何？

ご主人様は僕にたくさんの秘密を作るんだ。なんかだか、さみしい。

僕はそこで意識を失った。

## 2　日常（後書き）

まだ続きます！

頑張って書きますので、どうぞお付き合いください！

## 3　約束（前書き）

なんか……凄く痛々しい話になってしまいました；

## 3　約束

僕が目を覚ますとそこはベットの上だった。
ご主人様が運んでくれたんだ。
そう思うと、嬉しいような恥ずかしいような懐かしい感覚に陥る。
熱のせいか部屋が暑く感じられ、窓を開けようと思った。
そこで僕は窓に映る自分を見て驚き、思わず自分の首を触った。

――僕、首輪してる……。

ご主人様が付けたのだろう。いったい何のために？
そして、窓に手をかけたところで、また驚いた。窓が開かないようにセメントで塗り固められていたのだ。
ご主人様がしたのだろう。いったい何のために？
まさかとは思うが、これ、全部の窓やドアにしたんじゃないだろうな。
そして気付く。僕が感じていたご主人様への恐怖の正体はこれだ、と。

病的なまでの、独占欲。

「妹子、目が覚めたみたいだね。雑炊作ったけど、食べれそう？」
ご主人様が声をかけてきた。突然のことだったためひどく驚いた。
ご主人様には驚かされてばかりだ。

「はい。いただきます。」

僕が答えると、ご主人様は雑炊の入った鍋をベットの側まで持って

きてくれた。その上、その雑炊をスプーンにのせ、ふーふーして食べさせてくれた。
ご主人様にはこんな優しい一面だってあるんだ、怖がってばかりじゃいけない。それに初めて会ったときに安心感を感じたのは僕じゃないか。
そう思っているとご主人様は

「妹子、その首輪よく似合うね。」

と言ってきた。なんと答えていいかわからずに、黙っていると、

「その首輪は妹子が私だけ物である証だからとったら許さないよ？」

と言う。

「はい。」

ご主人様は満足そうに笑った。
笑顔が……怖い。話を変えないと。
そう思い、先程の犬の話を振る。

「そういえば、ご主人様、さっきの犬はどこに？」

ご主人様は雑炊を指差した。

「おいしいでしょ？子犬。」

目眩がした。成る程、だからお粥じゃなくて雑炊なのか。

「妹子がいけないんだよ。二人だけで生きていくって言ったのに。」

僕のほっぺを熱い液体が伝う。

「え？妹子、嬉しすぎて泣いちゃった？」

「泣いてないです！」

怖いんです。……あなたが。

「そうだよね。あの犬なんかのために、泣いたりしないよね？そんな事絶対許さない。」

ご主人様は僕のほっぺを伝う涙を舐めとる。

「ご主人様は……僕の事好きですか？」

「うん。壊しちゃいたいぐらい大好き。」

「だったら、僕に秘密作らないでください。真実もご主人様が思ったことも全部、僕に教えてください。」

ご主人様は僕をそっと抱きしめた。

「君が壊れてしまったとき、全部教えてあげる……。」

## 3　約束（後書き）

もし飽きずにつきあってくださるなら……凄く嬉しいです；

## 4　佳境（前書き）

曽良くんがやっと登場します！

## 4　佳境

僕はまた体調不良のため、ベッドに寝かされていた。ご主人様は今日もお買い物だ。
ご主人様が言っていた”アレ”って何なんだろう？　答えが欲しいなら、僕は壊れないと……。僕が壊れたらご主人様は喜ぶのだろうか？　だったら僕は……。
そんな事を考えていると、窓を強く叩く音がした。急いで様子を見に行くとそこには、人がいた。背筋が凍った。子犬でさえあんな事になったのに、人なんかがここに来たらご主人様はきっと……。あまり続きは考えたくなかった。

「妹子！　よかった、無事だったんですね！」

なんでこの人は僕の事知ってるんだろう？

「さぁ、早く一緒に帰りましょう。」

その人は窓を開けようとしたが、開くわけない。セメントで塗り固められているのだから。

「妹子、ここを開けて。早くしないと、あいつが、帰ってきます。」

そうだ、この人に早く帰ってもらわないと。

「死にたくなければ、早く帰ってください。」
「だから、早く帰るために、ここを開けくださいと……。」
「僕の居場所はご主人様の側なんです。一人で早く帰ってください。」

僕は首についている首輪を指差した。

「妹子、あいつの事を”ご主人様”って呼んでるのですか?!」

「はい。僕は、ご主人様のペットですから。」

「だから……首輪……。」

その人は目を見開いていた。すごく驚いているようだ。不思議な事はこの人とは、初対面の気がしないこと。

「……あなた、僕にとってどんな存在なんですか?」

彼の瞳に、怒りの念がこもった。

「あなたはせっかく助けに来てやったのに、まだ、記憶喪失のふりを続けるのですか?」

ふりじゃない。僕は本当に……。

「いい加減にしなさい。あなたがご主人様と呼んでるあいつはあなたを毒殺しようとしたやつなんですよ。」

違う。そんな訳ない。あの時のご主人様はああするしか、方法を知らなかったんだ。

「あいつは狂っています。側にいたら危ないやつなんですよ!」

狂ってなんかいない。狂っているなら寧ろ……

バンッ!!……

僕は思い切り窓を叩いた。そして、彼を睨みつける。

「うるさいんですよ。あなたがとやかく言える立場なんですかッ！？　全部あなたが仕組んだ事でしょうが、曽良！」

「……。」

曽良はふっ、っと笑った。

「なぁんだ。妹子、知ってたんですね？」

その笑顔はどんどん邪悪な物となっていった。

「いっそ、本当に記憶喪失になってればよかった。そうすれば、僕達は何もなかったみたいに、やり直せたのにね？　ほんと、残念ですねぇ……。」

## 4　佳境（後書き）

つくづく、キャラ崩壊が甚だしいですね；
見捨てないでください！↑

## 5　言い分（前書き）

過去編です！

三人の関係が明らかになりそうです！

## 5　言い分

僕はなぜか、異常に男にモテる。今の僕には恋人と愛人がいる。恋人は太子、愛人は曽良。太子と曽良と僕、小野妹子は元々仲の良い友達だった。あの時まで。

僕は何にも悪くない。仕方ないでしょう、太子が妹子と付き合い始めたんですよ。僕を差し置いて。妹子は僕達を仲良し三人組みたいに思ってたみたいだけど、それは大きな勘違いです。太子と僕は恋敵だったんですから。妹子は冗談だろうってぐらいに鈍感だから気付かなかったんですよ、僕達の気持ちに。下心丸出しだったというのに……。そして、太子に告られて簡単に付き合い始めました。でも、太子言ってました、

「妹子は本気じゃない、あいつは遊びだと思ってる。キスだって触れるだけのしただけで、すごく怒ってたよ。」

って。だから、僕が僕達の気持ちが如何に本気か教えてやるっていうのを口実に妹子を抱いてあげたんです。

えぇ……良かったですよ。妹子、可愛かったです。嫌がる妹子を無理やりベッドに押し倒して……彼、どんなに苛めても泣かないように堪えるんですよ。目には涙が溜まってるのに、

「泣いちゃうの？」

って言うと、なけなしの理性で悪態つくんです。すごく、良かった……。

――癖になっちゃうぐらい。

妹子と付き合ってたのは、私だったよ。
ある日を境に、妹子は私と目を合わせなくなった。何でか解んなかった。でも、その頃から、妹子は曽良から全力で離れようとしてたな。私、薄々妹子は曽良になんかされたなって、思った。だから、曽良に聞いてみたんだ、そしたら

「妹子、浮気してますよ。他の男の家入っていくの見たんです。それを妹子に言ったら、僕、避けられるようになっちゃいました。」

って。目の前が真っ暗になったよ。それと同時に、話には聞いていた独占欲ってのが私の中で顔を出した。
急に妹子をぐちゃぐちゃにしたくなったんだ。自分が、怖かった。

## 5　言い分（後書き）

まだ過去編続きます！

## 6　事件（前書き）

妹子が記憶のないふりをするわけが明らかになります！

## 6　事件

2人の男に立て続けに抱かれた僕の気持ちが解るだろうか。僕は、本気で、太子が好きだったんだ。なのに、太子も曽良も僕の事何にも気付いてないただの鈍感な奴だと思ってるみたい。確かに、まだキスとか、恥ずかしがっちゃうぐらいガキだけど。無性に腹立つ。あなた等の丸出しの下心に気付かないほど僕は馬鹿じゃない。

太子は狂いました。目なんか、濁っちゃって。ざまーみろって思いました。僕は太子が大嫌いだから、彼を利用してやろうと思ったんです。作戦はこう。

まずは、太子に毒を渡します。それから、その薬は、妹子をお前だけのものにする物だって言います。太子はきっとすぐに妹子に飲ませるでしょう、今の太子は独占欲の化身だから。それを飲んだ妹子は死にそうになります。そこで、僕が妹子に解毒剤を服用させて、妹子を助けます。で、太子を警察に引き渡して終わり。妹子は僕の物になり、太子は消える。完璧でしょう？

曽良がくれた薬が毒だって事ぐらいすぐにわかった。私だって、ただの狂人じゃない。だけど、良いものもーらいって思ったんだ。

まずは、この毒の解毒剤を調べて用意した。すごく大変だったけど、独占欲に支配されてる私にとっては全く苦じゃなかった。

……全てが揃った時、作戦決行だ。

その日は朝から、太子の様子がおかしかった。昼休み、いつものように3人で屋上で弁当を食べていたとき事件は起きた。突然、息が苦しくなったのだ。そして、目の前で閃光が……。僕は自分の体重が支えられなくなって、倒れた。太子も曽良もニヤニヤ笑っていた。

――殺される。

直感的にそう思った。

「妹子、良く聞くんだ。今までの記憶、全部捨てて。そしたら、私が助けてあげる。」

意味が分かんない……。どっちが言ってるんだろう？

「さぁ、どうする？記憶を捨てる？命を捨てる？」

まだ、死にたくなかった。

だから、朦朧とした意識の中で、僕は生き延びる為に呟いた。

「き……おく。」

「いい子だね。」

すっと口の中に冷たい液体が入ってきて……。

端的に言うと、僕の作戦は失敗に終わりました。太子を甘く見過ぎていたようですね。

それから、太子は妹子を連れて僕の前から姿を消しました。

## 6　事件（後書き）

もうすぐ完結です！

## 7　思い（前書き）

妹子は曽良をどう思っているのでしょう？

## 7　思い

「やり直す？バカなこと言うな。僕は、昔も今も、太子の物だ。」
「でも、僕に抱かれてあんなになってましたよね？妹子って本当に淫乱。」
「うるさい！太子に殺されたくなかったら、早く帰れ！今の太子はお前の知ってる太子じゃないんだ！甘く見てると、ホントにただじゃ済まなくなる。」

曽良は笑った。その笑顔はどこか悲しげだった。

「知ってるよ。僕がそうしたんだから。でも、悪いのは妹子と太子なんですよ。」
「頼む、帰ってくれ…僕は、太子がこれ以上壊れるのを見たくないし……っは……はぁ…」

久しぶりに大声をあげたからだろうか、それとも、薬のせいだろうか、息が苦しくなった。

「はぁ…はぁ」

言葉を紡ぐ事も難しくなってきた。でも、これは伝えないと……

「ちょっ、妹子！大丈夫ですか！？」
「はぁ…はぁはぁ……は…」
「妹子！」

僕は深呼吸をして、呼吸を整え、

「だいじょうぶ……」

と言った。そして、落ち着いて、伝えるべき事を確実に伝えた。

「お前が殺されるの…みたくないよ…」

曽良が息を飲むのがわかった。
僕は遠退き始めた意識を保とうと、必死に体に力を込めた。
しかし、込めようとすればするほど、力は抜けていく。
ヤバい…
僕はその場に膝をついた。

「妹子！どうしたんですか！？」

お前らのせいだよ、ばーか。

「妹子！妹子ぉ！」

僕が最後に見たのは、曽良が必死に窓を叩いている姿だった。

## 7　思い（後書き）

次回最終回です！

## 8　守られた約束（前書き）

すごくグロいです（｜｜；）
R15ぐらいでしょうか。

彼が死にます；

## 8　守られた約束

早く……早く目を醒まさないと……大変なことになる。早く……目を醒まさないと……曽良が……太子が人を……

「ッ！」

目を醒ました僕は、ベッドにいた。
太子が……ご主人様が帰って来たんだ。じゃあ、曽良はどうなったんだろう？早く今の状況を把握しないと。
そう思い、体を起こそうとした。そこで気付いた。

――僕の首輪からのびた鎖がベッドに括り付けられていて、更に手錠と足枷がされていることに。

ぞっとした。ご主人様が怖い。いや、ご主人様の独占欲が怖い。

「いーもーこ。」

その時、ご主人様が猫なで声で僕の名を呼んだ。

「起きたんだね。よかった。廊下で倒れてたから驚いたよ。」
「……ごめんなさい。」
「謝らなくていいよ。……もう今後こんな事が無いようにしたから。」

ご主人様が鎖に触れたのだろう。鎖の擦れる音がした。そして、ね？っと言い笑った声が聞こえた。

曽良は？曽良はどうしたんだ？ちゃんと逃げたのだろうか？

その時僕は初めてご主人様を見た。

そして、息を飲んだ。

ご主人は、真っ赤だった。

曽良で、真っ赤だった。

「今日のご飯は、バーベキューにしようか。妹子に元気がつくように。大丈夫、ちゃんと、ここまで運んであげるから、妹子はここに居ればいいんだよ。」

僕は、なぜか、笑った。

「はい、ご主人様。」

ご主人様が、太子が、愛おしくて仕方なかった。僕はそっと手錠をつけられた両手で、ご主人様の顔に付いている曽良を拭った。

ご主人様は僕に触れるだけのちゅーをした。

「あのね、妹子。昔ね、曽良っていう愚かな男がいてね……。」

その話は、僕ら三人の物語の全てだった。

## 8　守られた約束（後書き）

これで完結です。
今までお付き合いありがとうございました！

私史上最もいただけない作品でした。ごめんなさい。
深く反省しております。

次はもっとまともに読めるものを書きたいと思います！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0897p/

《太妹←曽》狂ったその先。

2010年12月25日19時49分発行